

中国医史学の三十五年（一九四九—一九八四）

李 経 緯

中国伝統医学の歴史は長い。この長い歴史の流れの中には、医史学を重視するというすぐれた伝統が一貫して保たれている。司馬遷は『史記』の中で、いち早く戦国時代の名医秦越人と前漢の名医淳于意の生涯・医療事跡・治療方法・処方などについて専門に論述し、客観的な論評を加えている。その後、各代の史学者が歴史を著述する時は、いずれも名医伝・医事制度・疾病の流行・医学文献・中国と諸外国との医薬交流の内容を加えている。これらは歴史についての論述であるが、医史学を研究するための貴重な史料でもあるといえよう。

隋・唐以降には、一部の医学に関する著作中に、疾病と学科の発展史についての論述が見られるようになる。たとえば孫思邈の脚氣病史と小兒科史などがそれである。そのうち、更に医学史専門の著作が出現している。すなわち唐・甘伯宗の『名医伝』などで、これには唐以前の歴代名医についての記述がなされている。この他、宋・周守忠の『歴代名医蒙求』（一二二〇）、明・李濂の『医史』（一五二三）、清・王宏翰の『古今医史』（一六九七）、同じく清・徐大椿の『医学源流論』（一七六四）、鄭焯の『医故』（一八九〇）など、医史に関する著作は現存するものだけでも百種近くあり、それらは中国の医学界が一貫して医学史の研究を重視してきたひとつの有力な証拠である。

医学通史専門書の出現は比較的遅く、なかでは私の師・陳邦賢教授の『中国医学史』（一九一九）がいちばん早く、一九

五七年には五度目の改訂を行っている。その一九四〇年度改訂版は山本成之助先生が日本語に訳され、『支那医学史』の書名で東京より出版されている。その後一九三二年に、王吉民・伍連徳の共著による『中国医史』（英文版）が出版され、国外に比較的広く伝わった。そして李濤教授の『医学史綱』（一九四〇）は、中国が世界医学史に論及した最初の医学通史である。

私はかつて一九四九年以前の中国医史学の論文とデータ性を持った報道に対して、少しばかりの統計をしてみたが、その結果次のような印象をうけた。中国の医史学は古い歴史を持つ一つの学科である。なぜならそれは悠久な歴史と優良な伝統をもっているから。しかし、それはまた比較的幼稚な学科、或いは一つの学科としてなかなか独立することのできないレベルのものであったと。そして学科としての理論が形成されておらず、最近百年らい、植民地文化の一部の特色をいまだにもっていたためである。最近三十五年間、中国医史学界は植民地文化の影響を一掃すること、理論研究を重視する点に比較的大きな努力を払い、少しばかりの成果をあげることができた。だが学科としての要求をみたすには、まだまだ大きな距離がある。我々の研究には、いまだに多くの空白と強化しなければならない領域が残されているのである。これがすなわち中国医史学が比較的幼稚な原因だと私は考えており、以下五つの面からその状況を紹介したいと思う。

一 学会、研究会と学術期刊誌

中華医史学会

中華医史学会は中華医学学会の一分会で、一九三五年に誕生。当時の名称は医史委員会。一九三七年四月正式に再編成されて今の名称になったが、この間、数回にわたって活動を停止している。一九七九年に会を再開してから、前衛生部長銭信忠氏を名誉会長に、陳海峰氏を会長に、程之範・耿鑒庭・李経緯（秘書兼任）を副会長にそれぞれ推選した。一九八四年に学会委員会を改選し、三分の一の委員を改選したが、会長と副会長は留任された。学会の学術交流は活発に行われ、

組織の發展も比較的早く、これまでの三つの地方分会しかなかった状態から十一分会に、すなわち北京・内蒙古・遼寧・黑竜江・上海・浙江・福建・安徽・四川・広西・陝西に發展、それぞれ一、二年ごとに全省市範圍の医史学術報告会がもたれている。その内容は、全国的な医史研究や教育等の課題のほかに、みな地方の特色に富んだ課題の研究と交流が特に重視されている。例えば内蒙古に於ける蒙古族医史の調査研究、安徽に於ける新安学派に坎する調査研究、浙江・四川等の浙江医学者と四川医林人物の研究、陝西の陝西医史、延安衛生活動の調査研究等がそれである。

学会組織は發展し、専門にこの仕事にたずさわる人材もたえず増えている。中華医史学会は一九七九年十月、北京で会再開後初めて第一回全国医史学術會議をもったが、応募した三百十の論文の中から五十余を選出し、その執筆者が大会に出席した。一九八二年には西安で「孫思邈逝去千三百周年記念学術報告会」がもたれ、代表百余名が参加した。一九八四年十月に福州でもたれた第二回全国医史学術會議には、代表百八十余名が参加。發表された論文は百篇近く、中国医学史・世界医学史等の内容について広範圍の討議と交流が行われ、空前の盛挙であつた。

研究会と記念会

中国には昔から保存されている扁鵲廟・仲景祠・葉王山などの記念的な建築物があるが、一九五〇年代には学术交流などという活動はあまり行われていなかった。七〇年代末に医史学術研究が活発になるにつれ、研究会と記念的な学术交流が盛んに行われるようになった。その多くが地方でもたれたにもかかわらず、全国的に専門家を招請して学術討論を行い、なかには外国の専門家が参加したものもある。例えば河南の南陽でもたれた仲景学術討論会には、多くの日本の研究者が参加している。その他の研究会と開催された記念会には、馬王堆医書研究会や扁鵲・張仲景・華佗・皇甫謐・孫思邈・李時珍・張景岳・蘭茂・陳実功・陳修園・王清任・唐容川・張錫純・趙燭黃・施今墨等、歴代の医家の記念活動があり、記念会では彼らの学術思想・成果について比較的広範圍の討論と交流が行われている。また、少数民族の医史研究を促進するために、中華医史学会は少数民族医史学グループも組織する予定である。

中国薬史学会

本会是中国薬学会の一分会で、一九八三年に創設され、薬史学研究所の学術活動をはじめている。

一九八四年十二月には、中華医史学会と中国薬史学会が連合して『医心方』完成一千周年学術報告会と座談会を中医研究院中国医史文献研究所でもち、席上、八名の専門家が丹波康頼とその著作『医心方』に対し全面的な評価をあたえた。

『中華医史雑誌』

一九四七年創刊。当初は『医史雑誌』の名称で季刊であったが、一九五三年に上海から北京にその編集が移り、『中華医史雑誌』と改称された。やはり季刊であったが、種々の原因で幾度も停刊している。一九八〇年の復刊号を第十巻第一期とし、復刊後の『中華医史雑誌』（季刊）には、中国医学史・世界医学史・文物考古・文献研究・少数民族医史研究・医史教育・医学交流史・専科史・疾病史・学術争鳴（論壇）・書刊論評紹介・ニュース等の欄が設けられている。復刊してからは寄稿量が増大し、論文の掲載率は寄稿数の三〇パーセントで、掲載しきれない原稿が沢山ある有様である。このため論文の質が高まり、固定読者はたえず増加し、発行部数も復刊当初の二千余部から七千三百部あまりになっている。多くの研究部門や個人が国外との交換に本誌を利用しているほか、国外の正式な固定読者も百を越えており、内外に比較的に広い影響をあたえている。

一一 医史学の研究機構と学術研究

中国に医史学の研究機構ができたのは一九五一年である。すなわち中医研究院中国医史文献研究所の前身——中国医薬研究所医史研究室がそれである。この研究室は、中国医史学者陳邦賢・李濤教授の主幹のもとで、高等医学院や大学の医史教材をつくり、医史師資訓練班を設けて医学史の専門的な人材を養成し、名医の遺跡調査や医史学研究・学術経験交流などの面で多くの創造的な仕事をなしとげ、中国の医史学の発展に一定の基礎を固めることができた。

李壽教授は一九五九年に病没、陳邦賢先生も一九七五年に逝去。以後研究室は私が主宰するようになり、一九七八年に医史と文献の両研究室が合併して医史文献研究室になった時に主任をつとめた。この研究室が一九八二年に昇格して中国医史文献研究所になった時、私が所長、馬繼興教授たちが副所長に就任した。いま所属人員は五十名、そのうち副教授以上の専門家が八名、講師クラスの専門家が七名、助手クラスの者が十余名である。医学通史研究室・少数民族医史・東西比較医史研究室・中医基礎理論文獻研究室・中医臨床文獻研究室・民間医学研究室等が設置されており、この他に医史博物館設置準備グループ、『中華医史雜誌』編集グループと図書資料室がある。

ここ数年らい、我々中医研究院は全国の代表的組織と共同して、『中医名詞術語選釈』（邦訳あり）・『簡明中医辞典』・『中医大辞典』（邦訳あり、継続出版中）・『五十二病方』・『武威漢代医簡』及び漢訳チベット医書『四部医典』等を編集した。私と程之範教授の共同責任編集による『中国医学百科全书・医学史』分巻、私の責任編集による『中医人物辞典』等も近く出版される予定である。我々は今、力を結集して『中医文献辞典』と大型分巻本『中国医学通史』を編集中である。また医史文献研究の機構もこの数年らい急速に発展しており、我々の研究所のほかに、上海中医学院が中医文献研究所を開設し、陝西・遼寧・湖北等にある中医薬研究所も医史文献研究室を設けている。これらの機構はみな専従者十人前後で、『中医年鑑』を編集したり、または主に地方医学史・地方有名医学者・衛生誌・専科学史の研究にたずさわっている。

医学史の研究面では、上記書籍の編著以外に、医史専従者・非専従の愛好家などによって、この数年間に通史的なものや専科史などの著作十数種が世に出ている。例えば賈得道の『中国医学史略』、趙璞珊の『中国古代医学』、韋以宗の『中国骨科發展史』、俞慎初の『中国医学簡史』等がそれである。『中華医史雜誌』とその他の医史専門のコラムを有する医学雑誌・科学史雑誌等に掲載された論文や各地の修士研究生の学位論文から見ると、医学史の学術研究のレベルは明らかにあがっており、数量はそれをしのいでいる。一九八三年と一九八四年の統計によると、『中華医史雜誌』とその他の期刊

誌に発表された医史類の論文は、毎月平均五十篇、その中でも人物と典籍の研究の占めるパーセンテージが一番多く、それぞれ三〇%と二〇%。その次が医療技術・専科史・文物考古・内外交流・疾病史などに関するものである。

近代・現代医史、少数民族医史と医学史の理論研究等は最も弱い部分で、世界医学史の研究はそれ以上に遅れている。ここで指摘しておきたいのは、私たち中華医史学会と地方分会の方向づけと、『中華医史雜誌』掲載論文の傾向性に対する各学会委員・編集委員の指導と努力によって、上記の傾向が比較的協調の方向に転化していることである。一例をとってみると、医学起源問題の討論で、かつてある時期には一致して「労働が医薬を創造した」と認識していたが、近年らい、一部の学者は人類医学と動物本能の救護行為には「継承性」があるとして、「医薬は動物(本能)に起源し、労働が医学を創造した」という観点を提起している。また一部の学者は、古猿の本能的な救護は医学の含意を備えていないとして、「人類医学の出現過程と古猿が人類に進化する過程は、同一歩調で進んできている」という観点を抱いている。医学の起源は巫術であるとする観点はすでに多くの学者から否定されているが、最近になって、巫術・宗教等と医学の発展関係についての問題を、より多くの学者が、もっと客観的に歴史的な評価を加えるべきである、巫術や宗教等の医学の発展に及ぼした積極的な作用を承認すべきであると主張するようになっていく。

次に、例えば医学の発展と哲学思想、医学者の人生観との関係についても、これまでに単一認識の傾向、簡単に肯定したり否定したりする傾向が存在していた。一例をとってみれば、近代前の医学者は往々にして歴史的作用を無視し、ただ宗教の信徒、儒学の崇拜者、道家の篤信者等の立場でしか問題をみなかったとしてこれを完全に否定したり、医学者が身分の低い、貧しい家庭の出であるだけで、すぐにこれを肯定したりしたことである。また、哲学思想と中国医学の発展とは非常に密接な関係があるが、学者のあいだに尻ごみをする傾向があるため、大胆にこの研究にとり組もうとする勇氣にかけていた。ここ数年らい、これらの面でも急速な変化が生じ、人びとは日増しにこれらの領域に関心をもち、討論や研究をするようになっていく。

周知のように、医学通史が読者に一目瞭然とした明白な概念をあたえることができるか否かは、まず医学の発展にマッチした歴史の時代区分が必要とされる。中国では、かつて上古・中古・近世の区分法をとったり、先秦・漢魏・隋唐・兩宋・明清等、王朝の興衰による区分法があったが、本世紀五〇年代から原始社会・奴隸社会・封建社会等の社会発展による区分法を多く採用している。

最近になって、医史学者たちは上記のいくつかの区分法は医学の見地からいうとあまりにも大ざっぱすぎ、中国医学の発展の実際と法則を確実に普遍的に反映しにくく、医学自身の発展の特殊性を体现できないと思うようになってきた。医史の時代区分の問題が掘りさげて討論されるようになったことで、学者たちは社会政治・経済制度・思想意識等の諸要素と医学発展との関係に関する研究をより一層重視するようになり、社会の分裂・統一・戦争等の医学発展に及ぼした影響、隋唐宗教・兩宋理学、中国医学を二千年にわたって支配した陽陰五行思想の医学発展に及ぼした影響などの問題に関心をよせるようになっていく。

また、医史人物の評価問題には、一貫して様々な傾向が存在していた。甚しきに至っては、歴史の實際を離れて古人を無理矢理理想化してしまう現象さえ生じていた。どのように正しく医史人物の評価を討論して、これらの論文や著作に積極的な影響をあたえることができるのか、この面での研究は、近代現代医史・少数民族医史・世界医史・東西北較医史の研究と共に、ここ数年らいなべて進歩のあとが見られ、學術レベルもたえず高まっている。これまで誰ひとり敢えて手をつけなかった近代医学者、特に現代医学者の研究、たとえば丁福保・趙燏黃・傅連璋・王吉民・陳邦賢……等についての研究もすでに専門に論じた文章や伝記が書物や刊行雑誌上に發表され、これまでの「人間の評価は死後きまる」という風習もすでにうち破られ、多くの健存の医学者の學術成果や伝記が表彰されている。

医学人物の研究は、いかに正しくその歴史に及ぼした作用を評価すべきかという討論を促進させ、人物の伝記・學術思想・學術成果とその評価に関する問題の研究は、いまや盛んにとり組まれている。一九八三年から一九八四年の一年間に

発表された文章のうち人物は二〇%を占め、いま中国の医史界は次第に学術争鳴の学風を形成しつつあり、意見のわかれた学術問題に対しても自由に討論をくりひろげることができるようになっている。たとえば、扁鵲の平生の問題、孫思邈の生年の問題、張仲景の出生地と長沙太守であったかどうかの問題、曹操の軍隊が赤壁の戦いで敗北したのは住血吸虫と関係があるという問題などがそれである。学術思想はいきいきとした様相を呈し、争鳴は熱烈をきわめ、医史学の領域は空前の喜ばしい局面を迎えているのである。

三 医史学の教育と研究生の育成

中国の高等医学教育に医学史の課程が設けられたのは比較的遅い。本世紀の初め、一部有識の士が政府未承認の通信教育と中医学院や大学に設置した「医学史」課によって、この分野に手がつけられた。この時中西医结合派医学教育家の樺鉄樵が、孫永酢先生を招請して編纂した『医学史』（一九二二）三巻を、通信教育講座の一部として印刷発行している。その後まもなく、中国の著名な医史学者——陳邦賢が江蘇省医政学院（現在の南京医学院の前身）に招聘され、医学史・疾病史を教えるようになった。これとほぼ同時期に、中国の著名な医史学者李壽が北京の協和医学院に中外医学史の課程を設け、また広東・湖南・四川・北京等の国立医学院なども、それぞれ医学史課程を設けて自作の講義用教材を印刷している。そして一九四九年にはじめて、李壽教授が北京大学医学院（現在の北京医学院）に医学史料を創設したのである。

最近の三十余年間に、医史学は科学の一分野として日増しに中国医学教育部門から重視されるようになった。この間に歩んできた道は平坦ではないが、発展したことは極めて明らかである。目下、二十三の中医学院の教育課程で医史学は学生の必修課程であり、授業時間も三十八時間からひき続き増加している。医史学教育の質をたかめるために衛生部は全国の専門家を組織し、高等医学院や大学で使用するために統一の中国医学史講義を作成し、教育摘要を制定した。一部の学院や大学では電化教育設備を利用して、「中国医学史」の映画や医史人物の一生や学術思想・成果などのビデオを製作し、

多くの学院にはみな中国と世界の医学史のスライド設備があり、それぞれこぞって学生の見学に供する特色のある医史教育用陳列室などをつくりつつある。

現代医学の医学院や大学（すなわち西洋医学）の医史学教育は、いまだにそうとう遅れた状態にある。中国には現在高等医学院や大学などが百十余あるが、医史学教研室があり、医史学課程を開設しているのはわずか七校、その多数が最近数年間に回復したり、新設したものである。現段階で、中国の中・西医高等医学院や大学にある三十の医史学教研室の教師は二・三名、多くて五・七名にすぎず、各教研室で副教授以上の教師は三分の二にたらない。だが喜ばしいことに、医史学教育はすでに日増しに多くの教育者と医学生たちに重視されるようになり、高等医学院や大学で医史学の教育を強化してほしいという呼び声はますます多くなっている。そこでこれらの学校で医史学を担当する教師の資質を高める必要が要求され、この急な需要に応ずるため、衛生部は中医研究院中国医史文献研究所に委託して全国医史科学教学中堅分子学習班を開設、我々の研究所に対して全国医史学教師の資質を育成する基地になるように要求している。一九八四年十月十七日に開設したこの班は、一九五六年以後に設けられた二回目の班で、期間は一年、學員は各高等医学院や大学の助教・講師らである。前半年は中国医学通史・中国医学学科史・世界医学史・医学と哲学等を教授するほか、天文学史・化学史・物理史・建築史・生物史・農学史・数学史等の自然科学史、哲学史・宗教史・考古学史等の社会科学史の講座、目錄学・版本学・文字史・医史論文の作成方等がある。後半年は一カ月で、分担して名医遺跡の調査研究を行い、四カ月間で論文を作成、または調査報告・質疑応答などが行われている。

医史修士研究生の育成

一九七八年に、私は同僚と協同して、中国医学史上初めて修士研究生を共同募集した。応募者数の多かったことと、試験成績の優秀だったことは予想外で、臨時に衛生部・教育部に申請して採用人員数を三名から五名に増やしたほどであった。これらの學員は三年間学習して、いずれもすぐれた成績で修士の学位を得ている。彼らの医史科学研究と教育の能力

はすでに広く認められており、卒業後、中医研究院と上海第一医学院・河北医学院等の部門で、科学研究課題の遂行・教材の編纂などの面で中堅者として活躍している。その翌年から、広州中医学院・湖南中医学院・黒竜江中医学院・ハルビン医科大学・成都中医学院・北京中医学院・北京医学院・上海中医学院等で、あいついで医史修士研究生を招集するようになった。我々の研究所ではあくる年に中医古典文献校勘注釈の修士研究生を募集はじめ、國務院学位委員会より中国医史文献研究所の教育能力・レベル・設備条件等にもとづいて、修士学位授与部門の許可があたえられた。これと同時に一部の姉妹部門もこの資格を獲得し、我々の研究所についていえば、一九八四年末までに卒業した研究生は十二名、すでにその中の十一名が修士の学位を得ている。在学者は十一名で、我々は一九八五年には募集人員を増やし、新たに十名採用する計画をたてている。不完全な統計によると、全国ですでに卒業した医史文献学の研究生は約五十名、まだ在学中の者がこの他に五十余名である。このような修士研究生の育成により、医史研究の後継者が不断に増加し、医史学という学科を盛んにし、発達させるための重要な保証となっている。

四 医史博物館と名医記念館

医史博物館や名医記念館を名実ともに充実したものとするには、一定の状況のもとでは医薬衛生の考古や文物の収集が密接に関係する。かつての中国では時おり医薬衛生文物が発見されることもあったが、当時の政府が重視しなかったために数多くの貴重な文物や文献が盗まれて売られたり、違法な手段で国外へ運びだされ外国の所有物となっている。

人民共和国になってからは政府が考古の発掘と文物の保護を十分に重視しているので、国の文物考古部門の計画的な発掘と基礎建設現場からのおびただしい出土物により大きな成果があげられている。これらの発掘と発見は、中国のそれぞれの歴史年代における科学文化・政治経済・民族関係・内外交流の科学的な研究に、極めて豊富で貴重な文物による実証を提供している。医薬衛生文物の考古発掘はいまだに一つの学科として独立しておらず、このため基本的にはもともと計

画していた考古ではなく、みな実際に考古発掘時にたまたま大量にその種の文物が発見され、医史学界の学者がはじめてそれらの研究に参加できるという状態にある。

とはいっても、この三十数年らしい、衛生文物の考古研究は眼をみはるようなすばらしい成果をあげている。例えば、石器時代の外科・針灸用具——砭石・石針・骨針等が各地で発掘されている。また、蒿城商墓の薬用植物の種子・発酵粉、湖北雲夢秦簡の中の衛生律令竹簡、秦阿房宮の浴室と地下水道系統、河北滿城の漢中山王劉勝の墓から出土した針灸用針——金針・銀針、薬をまぜあわせたり煎じたりするために用いた「医工銅盆」等十余種の器物。湖南長沙馬王堆一号漢墓の女性屍体と医療・防腐薬材。三号漢墓の大量の医学著作、例えば非常に貴重な『導引図』『五十二病方』等十余種。甘肅武威漢墓から発掘された『治百病方』『武威漢代医簡』。陝西西安南郊の唐代の穴倉に貯蔵されていた上等丹用鉍薬物八種、及び金・銀・玉・めのう等で造った製薬・貯薬・服薬用の器皿用具二十余种。福建古港泉州湾から発掘された宋代の海運沈没船中の香料薬物十余種。これは脱水していない状態で二三五〇余キロある。また、江蘇江陰からは明代の外科手術器具とその他の医療器皿等十余種類が出土している。

上述の発掘と研究によって、我々は中国の各時代の医薬衛生状況に対しより一步認識を深めることができ、一部のものは我々のこれまでの若干の論点に対して、より説得力のある証拠を提供した。このため中国の医史学界から重視され、諸外国の友人の関心をひき起こし、ますます多くの日本・アメリカ・西ドイツ等の学者の研究心をかきたてるようになっていく。文物考古の研究で、中国と日本間には大きな合作の可能面があると私は信じている。中国の医史学界はこの方面でも、それなりの成績をあげている。例えば数百をかぞえる研究論文がそれぞれの関係学会議で発表され、その中で期刊誌に発表される機会を得たものは百近くである。これまで整理して出版されたものには『導引図』『五十二病方』『武威漢代医簡』『治百病方』等の文物考古人員と我々研究所の共同研究成果があり、これらは衛生部から表彰されている。

それと同時に、中国医史学界は科学研究の必要性と研究生の独立考察能力をたかめるため、絶えず専門家や研究生を組

織して、扁鵲・張仲景・華佗・皇甫謐・孫思邈・王燾・宋慈・李時珍・王清任・王肯堂・陳実功たちの遺跡などを实地調査研究し、多くの価値ある文物資料を発見している。例えば河南湯陰太行山麓の藥王洞から出土した多くの孫思邈を記念する宋・元・明・清代の石碑などがそれである。これらはまた遺跡の保護と修復を促進する役目も果たしている。

医薬衛生考古発掘の豊富な收穫は、医史博物館の建設と発展に比較的利益な条件をつくりだし、中国の医史博物館はこの三十余年、特に最近の数年間に急速な発展をとげている。

上海中医学院医史博物館の前身は中華医学会中華医史学会の主宰する医史博物館で、一九三八年に開設準備がなされ、一九五一年に中華医学会図書館に陳列室を設立、一九五四年に正式に医史博物館が開設された。この博物館は上海市衛生局と中華医学会の重視と支持をえて、大量の貴重な医薬衛生文物と早期の医学期刊雑誌等を收藏している。一九五九年に上海中医学院の附属となり、専門者により管理され、専門の経費が支給されて、より発展することができ、国の内外の見学者に開放されるようになった。これは中国でも歴史の悠久な、規模の比較的大きい、珍品を多く備えた博物館である。

陝西中医学院医史博物館は、一九七六年に開設準備がなされたが、古都長安や咸陽に位置しているため文物を収集する条件に恵まれ、一九七八年には正式に館を設けて陳列できるようになった。今日までわずか八年間の間に收藏の医薬衛生文物の珍品は急速に増加し、陳列も系統的でうしろの雁が先になる勢いである。そしてすでに内外の見学者に開放されて好評を博している。

中医研究院中国医史文献研究所の中国医史博物館は絶世の珍品が多く、一九七八年に開設計画がたてられ、一九八二年五月に研究所と同時に誕生し、内外の見学者を接待している。

広州中医学院もこの数年、個人の收藏家が珍藏していた千を越える医薬衛生文物を収集して、目下鑑定と陳列準備にとり組んでいるところである。この医学院の医史博物館も近い将来に正式に開館し、内外の見学者を迎えることができるであらう。

上述の四博物館は各々に特徴があるが、より多くの珍品を収蔵して館の財産と展覽芸術を充実するために積極的な努力をかさねている。このほかに一部の中医学院でも医史教育の必要にもとづき陳列室を準備しているが、規模が小さく、陳列も複製品が多くを占めている。

中国の歴代名医の記念館も、ここ数年らい急速に回復・発展している。三十数年前まで、中国の古代名医を記念する歴代の祠堂・寺廟などは長期間修理されず、そのうえ六〇年代の動乱による破壊で、幸いにも形をとどめ得たものはごくわずかであった。中には荒れるにまかされ、廃墟と化しているものさえあった。この数年らい、張仲景を記念する“仲景祠”、孫思邈を記念する“藥王山”、李時珍を記念する“李時珍文物保管会”と“李時珍事跡展覽館”、華佗を記念する“華佗廟”、蘭茂を記念する“蘭公祠”等がそれぞれ政府の援助によって新しく修繕され、地方の重要文化保護財に指定されている。また各地で専門的に医学者の著作・文物等を集めて、陳列室・記念館等を開設している。現在、上記の医学者を記念する建物が修復・拡充されたほか、扁鵲を記念する“鵲王廟”・“扁鵲墓”や陳修園の記念館、新安学記念館、華佗を記念する“華佗墓”……等があいついで回復されたり、修復の準備がすすめられたりしている。また、河南南陽・安徽亳縣・江蘇徐州・陝西耀縣・湖北蕪春・福建長樂等でも、あいついで張仲景病院・華佗病院・孫思邈病院・李時珍病院・陳修園病院等が開設されている。

五 医史学科研究の動態と趨勢

中国における医史学の研究は、三十五年前までは基本的に自然発生の状態にあった。計画や任務もなければ、固定した方向も目標もなかったのである。人民共和国が誕生してから、おおまかに三方面の主な要素が中国医史学科の迅速な発展を促し、中国医史学研究論文課題のいくつかの特徴を形づけた。

その一つは、中国近代史の一部が列強の侵略を徹底的にうけた歴史であるということ。これは特筆する必要がある。同

時にそれは外来文化と固有文化が激しく争奪しあい変革しあった歴史であり、現代科学技術が輸入され、一定程度、固有の科学技術にとって換わった変革の歴史でもあった。政府が無能だったことと、これらの関係に対する処理の仕方が不当だったため、そうとう多数の者の心に民族劣等感と外国崇拜、外国に媚びへつらう思想が次第に生まれた。それが医学科学の面で、政府関係・衛生指導部門・一部の現代医学を職業とする者の間に、ただ西洋医学だけを承認し、甚しきに至っては「旧医を廃止して医事衛生の障害を一掃する案」を通過させ、中国の伝統医学を衛生事業における障害と見なし、期限つきで取締り、消滅させようとする者さえあらわれた。このため中医と西医がまっ向から対立する局面が生じたのである。

本世紀五〇年代初期に至っても、中国伝統医学の科学性とその歴史経験を手本として認めるか否かについて、中・西医のあいだで依然として激しい論争がつけられていた。このため、中国の医史学の研究は巨大な任務にたち向かわざるをえなかった。すなわち中国伝統医学の輝かしい歴史を発掘し、歴代医学者の医療技術や学術面での成果と傑出した貢献を研究し、以て人びとの伝統医学に対する一方的な認識といまだに存在している民族劣等感の思想を糾正し、より多くの有識の士を中国伝統医学の発掘・整理と研究等の仕事につかせることがそれであった。かくして医史の研究は、人民政府・衛生部の指導者・医薬衛生関係者・知識界の広範な関心と注意を得ることができるようになり、医史の研究・教育・普及宣伝は十分に必要であることが認められるようになったのである。

その二は、中国の医学科学には二種類の医学が存在しているという現実から出発して、人民政府が旧政府と完全に異なった政策をとったこと。即ち伝統医学に対して扶持発展の政策をとり、中国医薬学の遺産の継承発展を強調し、西医は中医から学び、中・西医は結合して中医学を学び、長を取り短を補い、中国の特色に富んだ統一的な医学科学を創造することを提唱したのである。中国に二種類の医学が存在していることに對し、上記の目標を實現することができるか否か、少なからぬ人が懐疑的な態度を抱いていた。医史学研究により医学発展の法則性を討論し、中国伝統医学を排斥する非科学

的な態度を論及して批判的にこれを継承し、研究と結合させ新しい医学を創りだすことは医学の発展にとって必然といえよう。これによって人びとが中国伝統医学の継承と発展を重視し、大量の説得力のある論拠を提供しえたことは、医史学科が比較的迅速に発展できた重要な要素の一つである。

その三は、一九五六年から現在まで中国は中医の継承人材を育成するために、二十三校の高等中医学院や大学を開設したこと。学制は五年と六年の二種類で、課程の設定にあたり、学生が中国の伝統医学の発展状況に対して一つの比較的系統だった認識をもち、視野を広め、理論思維の方法を育成し、中医学を継承発展させる自信をもたせるために中国医学史の授業を設けて重要必修科目とした。この課程は教育計画の中でも比較的重要な地位を占めており、教師の教育の質をより一歩たかめることが要求され、教師が研修や科学研究に参加することによりまた直接に医史学の繁栄と発展を促進している。もちろんその他の要素もあるが、上述の三つの要素が、中国医史学という学科が中国において比較的迅速に発展できた主な要素であると考えている。

上述の三要素は中国医史学の発展方向と内容を大きく左右し、数多くの研究課題の選択はこの三要素の要求に適應するように遂行され、中国医史学発展の若干の特徴と趨勢を決定している。三十五年間に発表されたそれぞれ性質を異にした論文から見ると、大まかに二段階にわけることができると思う。その一つは前三十年間の第一段階である。中国歴代の医学者は医学科学の技術面で諸外国に先がけた発明創造をなしとげ、医学校・病院・伝染病隔離・医書の刻印・校正医書局・薬典の頒布・福利施設などの先進的な成果が比較的多い。この範疇に対する大量の論文と医史知識の普及は、医学界に存在していた無為徒食・民族虚無主義等の思想影響・民族劣等感等の解決に比較的大きな作用を及ぼした。そして中国の伝統医学は普遍的に重視されるようになり、医史学研究と医学科学の健康な発展は十分明白な相互促進作用を示すようになった。

二つめは、最近五年間の第二段階である。上記の主要傾向からいまだに離れることができないとはいえ、医学発展に対

する社会学的要素の影響や、医史学理論問題等の研究がより多くの学者の注意をひきはじめ、この五年間は中国医史学科学研究の趨勢に一つの転換期であるといってもよいだろう。医史学はいまより系統的、より全面的な方向に向かって邁進しており、このような転化は中国医史学会における思想の活発化・題材選択の豊富多彩化・學術争鳴と自由討論の發展等の状況下に出現したもので、中国医史学が一つの新しい段階につき進み、この先、よりよい方向に進歩發展することを意味づけている。この趨勢は以下の七方面に要約することができる。

第一、より広範な多学科的研究に向かって伸展していること。上述のように、三十五年らしい中国医史の研究を量と質の面から分析してみると、單純に医学科学技術の成果に重点をおいた論述が絶対的優勢を占めている。これは中国の現実的要求と密接な関係があるが、医史学科を發展させて医学の發展を探索するという法則性からいえば、このような研究はその要求に適応しがたい。中国の医史学者はますます多くこの種の傾向に注意するようになり、これらの發明と成果の基礎の上に立つて、その思維の方法を重点的に探索討論している。社会の各種要素は促進の働きをしたのか、それとも制約したのか。なぜ成功したのか、またはなぜ失敗したのか。たとえ一冊の古代医学書を研究するにしても、必ず正しい歴史觀をもたねばならず、作者が任意に評価したり、けなしたりすることはできず、歴史の實際に符合した客觀的な評價が強調されねばならない。このためにもより多学科的な総合考察が必要となり、医学發展の一つの歴史区分・歴史的な事件等に対して多学科的な考察がより必要となったのである。なぜならば、それと社会の發展・政治經濟・戦争の災禍・宗教巫術・哲學意識・指導的人物の役割等との關係が非常に密接だからである。この觀點は、いま中国医史学研究者の関心を招き、中国医史学研究は今後繼續して医療技術の創造と發明に関心をもち同時に、より広範に多学科的総合研究の方向に転化し、理論研究は今後より強化されると予見できよう。

第二、少数民族医学史の研究が發展しつつあること。周知のように中国は多民族の国で、そのうちのチベット族・モンゴル族・ウイグル族・チワン族・タイ族等はみな基本的には漢族医学に属しているが、完全に同一ではなくその民族の特

徴を備えた医学理論と経験をそれぞれもっている。彼らは悠久な歴史と豊富な典籍文献を所有しているばかりでなく、今でもそれを継続して運用している。たとえばチベット医学は千余年の歴史と数百種類の医学文献があり、チベットを除いたほか、青海・甘粛・新疆・四川・雲南・内蒙古・遼寧等の省と自治区には、みな多くのチベット族の医者が人びとの病氣治療にあたっている。このほかに、中国の歴史には、吐谷渾・契丹・女真等の古代民族の医学が存在している。しかし過去の時代には、中国の医学界のこれに対する研究は非常に少なく、この種の状況は漢族学者がそうであるばかりでなく、各少数民族の学者の中でもあまり注意を呼び起こさなかった。現在、このような状況を改める呼び声は非常に強く、漢族学者や各少数民族学者をとわず、みな努力して調査研究を行い、チベット医史・モンゴル医史・ウイグル医史等の研究が大きな成果をあげることが期待されている。この数年間の努力により上述の状況は改められ、『中国医学百科全书』の「医学史」「チベット医学」「ウイグル医学」「モンゴル医学」等四つの分巻にはすべて民族医学発展史の内容が収められ、それらが良い方向に発展するのに役立っている。少数民族の医学史の人材も成長しつつある。上述のように、中華医学会・中華医史学会は少数民族医学史の研究と学術交流を強化促進し、少数民族医史関係者と団結するために、民族医学史研究グループを設置することを討論している。

第三、近現代医史の調査研究がすでに歩みはじめたこと。ある時期に、多くの人びとは近代現代医史の研究は難儀な仕事だと畏れを抱き、避けられるなら避けて通りたいという態度をとっていた。その原因は多方面にわたっているが、その重要性を完全に認識していないわけではなかった。このため、人びとがそういう見方を変えて、畏れを抱かないようになれば、このひっそりとした局面も迅速に改めることができると思う。医学の領域からいえば、先人を記念するために、一九八〇年『中華医史雑誌』復刊後の第二期に、我々は陳邦賢・李濤・王吉民先生ら三名の中国医史学者の生涯とその学術成果を要約して紹介した。文章はそう長くなかったが、影響は比較的大きく、医学界が近代現代医史の研究を重視する引金となった。その後『当代中国』、省・市の『衛生誌』、『中国医学科学年鑑』『衛生年鑑』『中医年鑑』『外科年鑑』『中

国人名詞典』等や『回憶録』『口頭史』等すべてが、現代医史の研究を大きく促進させている。最近健康医学者の伝記も数多く出版されている。全体から論じれば近代現代医史の研究はいまだに遅れているが、近代前の医史が絶対的な地位を占めている局面はすでに改められ、時間の推移につれて近代現代医史の研究がより顕要な地位を得ることができるようである。

第四、医史学の理論研究は、今後より大きな発展をすること。広義の医史理論研究が、人物の評価・社会の諸要素との関係・医学起源の問題等を包括していることについては第一の項目ですでに述べたので、ここでは狭義の理論研究の動向についてふれる。即ち医学史と医史学の学科性質問題・医学領域の地位・意義等の討論に関して、少しばかり説明を加える。まず医史学の性質の問題だが、現在の中国医史学者は大方こう思っている。医史学の研究は必ず『医学発展の歴史経験』と『医学発展の法則』の討論を強調し、以て現代中・西医学発展の根本にしなければならない。医史学の性質を明確にさせるために、かつて何が医学か？ という問題について数回にわたって論争した結果、初歩的な統一見解がもたらされた。この見解は『中国医学百科全书・医学史』分巻の第一条に反映できるはずである。だが何が医学史か、何が医史学か、その医学領域内での地位はどうなのか、医学の発展にどのような意義をもっているのか、これらについては中国の全国的な医史学術会議や地方における会議で討論中である。これらの討論により、多くの研究者が現代の国際学界のあれこれの論点を吸収し、個人の結論の説得力を強化している。

第五、世界医学史の科学研究教育に対する関心をひき起こしたこと。中国の医史学界は、これまで世界医学史の研究の面でかなり遅れていた。深く研究するなどという言葉は使えないほどで、少しばかりの翻訳または総合的に述べた文章があるだけだった。現在、このような状態は改められつつあり、世界医学史の研究は人びとの関心をひき起こし、普遍的にこの部門の研究が不可欠であることが認められるようになった。このため、世界医学史に関する若干の特定テーマによる研究論文が増えるようになり、洋の東西を比較した医史の研究は中国において一つの新しい学科を形成しつつある。私の

研究所ではこの必要に応じて、少数民族医史と東西比較医史研究室を設置して修士研究生を招聘している。力不足ではあるが、一つのさい先のよい出だしといえよう。

第六、文献研究論文が大幅に増えていること。中国の医学古典籍は極めて豊富で、我々はよく“浩如烟海”（大海原のように広い）とか“汗牛充棟”（蔵書が家の棟にとどくほど、牛が汗をかくほどである）という言葉で形容しているが、目録編集の近況からみると、現存中医薬書籍は全国で一萬種類に近い。この数年らい政府は古典文献（主に文学・史学・哲学）の校勘・注釈・出版を強調し、医薬学古典文献の校勘・出版も巨額の予算を獲得しているため、五〇年代に比べてより広範に行われるようになった。この背景により、古典医書の評価・研究等の論文も急速に増え、一九八三年～一九八四年の二年間に全国の期刊誌に発表された医史関係の論文は総計一千百余に達し、その中で文献や医学書に関するものは三〇%を占め五〇年代、六〇年代に比べて明らかに増加している。この種の状況の出現は、目前の状況からいえばこの先も若干年つづくと思われるが、これも客観的な需要が決定するであろう。

第七、国際学術界との交流が広まりつつあること。一九四〇年に中華医史学会はすでに国際医史学会の成員だったが、国際的な医史活動に代表を派遣したことはなかった。この数年、わが国の対外開放政策に従って、中国医史学界と国外学との学術資料の交流と相互考察活動はたえず増えている。我々中国医史文献研究所を例にとってみても、日本・アメリカ・西ドイツ等の科学史・医学史関係の専門家や学術団体と比較的密接な関係をうちたてており、一部の国際学術組織とも接触している。また我々研究所から考察や仕事をふくめて延べ九名が、前後してアメリカ・日本・メキシコ・タイ・西ドイツ等に招かれて学術交流を行い、期間は短期で一週間、長期は三～六カ月に達している。彼らは多数の科学史研究や教育の機構・博物館等を見学し、多大な啓発をうけている。これと同時に、我々の研究所もこの数年らい日本・アメリカ・イギリス・インド・西ドイツ・スイス・ハンガリー・ホンコン・台湾等の学者の見学訪問を迎えいれ、学術報告、または研修考察・課題研究等を行い、その人数は延べ五十名に達している。これらの活動を通じて我々も大いに得るところ

があった。上述のすべての活動は国際同学間の友情を増し、国際間の学術動態、勉学研究方法と理論を理解し、先進的な文物考古技術を把握し、または現代科学技術の医史研究面での応用等のために十分に必要であると思う。わが国の経済の発展にともない、中国医史界と国際友人たちとの学術交流・相互訪問・考察・合同研究・研究生の育成・情報交換などの機会が、今後より多くなることを私たちは強く確信している。

(中医研究院医史文献研究所長、副教授。中華医学会中華医史学会副会長。中国科学技术史学会理事)
(翻訳／北里研・東医研・医史学研究室、真柳誠)

Fifty five years of Chinese Medical History (1949~1984)

by

Li Jing-Wei

The study of medical history in China is blessed with a long history and a fine tradition. However, at the same time, it is difficult to see it as an independent field of study since it is relatively undeveloped, having in sufficient theoretical structure. Not only that, but for a period of 100 years it was never completely free from the influences of colonialism.

However, in the last 35 years, the sphere of medical history studies in China has been swept free of all colonial influence and great effort has been put into research, with the result that a little progress has been made. However we are still a long way from achieving recognition as an independent field of study.

In the study of medical history in China at present, there still remain many fields needing work and the people to do it, however I would like to introduce the situation at present from the following five viewpoints: "Academic Societies, Research Groups and their Journals"; "Research Systems and Research"; "Education"; "Museum and Depositories"; and "Trends in Research".